

# 前言語期の親子コミュニケーションにみられる代弁<sup>1</sup>

岡本 依子<sup>a</sup> 菅野 幸恵<sup>b</sup> 川田 学<sup>c</sup> 亀井 美弥子<sup>d</sup> 東海林 麗香<sup>e</sup>  
八木下(川田) 暁子<sup>f</sup> 高橋 千枝<sup>g</sup> 青木 弥生<sup>h</sup> 石川 あゆち<sup>i</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学保育学科 <sup>b</sup> 青山女子短期大学子ども学科 <sup>c</sup> 北海道大学大学院教育学研究院  
<sup>d</sup> 白百合女子大学生涯発達センター <sup>e</sup> 山梨大学大学院教育学研究科  
<sup>f</sup> 独立行政法人老人・障害・求職者雇用支援機構北海道障害者職業センター  
<sup>g</sup> 鳥取大学地域学部 <sup>h</sup> 松山東雲短期大学保育科 <sup>i</sup> 愛知県知多児童相談センター

## 【抄録】

親はまだしゃべれない乳児とどのようにやりとりできるのだろうか。おとな同士のコミュニケーションがことばに大きく依存していることと比較すると、乳児とのやりとりは困難なものに感じる。しかし、実際に親は乳児とまるで通じ合っているかのようにコミュニケーションを行っている。このような視点で親子のやりとりを見直すと、前言語期の乳児に対して、親がまるで乳児の考えや感情、要求、拒否、希望を反映させているかのように、乳児の代わりに発話していることがわかる。たとえば、ごはんを食べている乳児に「おいしいねえ」と言ったり、おむつ替えをしながら「ああ、さっぱりした」と言ったりするように、乳児の考えや感情をおとなが言語化する。つまり、親は自身の発話のアドレス性を操作し、子どもの声(Wertsch, 1991)を帯びた発話を行っているのである。本研究では、そのような発話を代弁(Parental Proxy Talk)とし、IDS(乳児に向けられた発話; Infant-Directed Speech)として分析する。本研究は、前言語期の乳児と母親のやりとりから、母親の発話を分析対象とする。母親の発話を誰を発話主体としていたか、誰の声であったかという視点でひとつひとつ分析した。その結果、4つのタイプの代弁、すなわち、(1)子ども視点型の代弁、(2)親子視点型の代弁、(3)あいまい型の代弁、(4)移行型の代弁が見いだされた。

## 【キーワード】

代弁 親子コミュニケーション 縦断研究

## 目 的

親は、まだおしゃべりのできない乳児とどのようにやりとりができるのだろうか。おとな同士の

コミュニケーションでは、それまでの人生において習得してきたことばや文化的非言語的手段、つまり身振りや表情といったコミュニケーション・スキルを用いて、やりとりがなされている。もちろん、このようなコミュニケーション・スキルをもってしても、相互理解が完全に達成されることは難しく、伝え合うための努力が必要である。し

---

## <連絡先>

岡本 依子 yoriko@shohoku.ac.jp

かし、コミュニケーションの相手が、ことばも文化的な非言語手段も未習得である前言語期の乳児であればどうだろう。前言語期の乳児と親とのコミュニケーションは、圧倒的に非対称な関係(Adamson, Bakeman, Smith, & Walters, 1987)のうえに成り立っているといえる。

また、近年、乳幼児との接触経験がないまま親になった母親が増加しており、育児が始まる乳児期初期に、育児や乳児の経験不足から、わからなさや不安を感じやすいことが指摘されている(厚生労働省, 2003)。

子育て初心者といえる初めて子どもをもった親は、非対称な関係におけるコミュニケーションに対して、どのように向き合っているのだろうか。本研究では、前言語期の親子コミュニケーションを通して親への移行について探ることを目的とする。

ところで、乳児と親とのコミュニケーション・スキルには大きな相違があるものの、そのことは乳児がコミュニケーションに参加できないことを意味するわけではない。実際に、前言語期の乳児に関するコミュニケーション能力を示す研究は数多く示されている。たとえば、乳児がおとなの話しかけに身体的に反応するという相互同期性(Condon & Sander, 1974)や、おとなの口の開閉を模倣することができるという新生児模倣(Meltzoff & Moore, 1977; Field, Woodson,

Greenberg, & Cohen, 1982)は、岡本(1982)も発達初期のコミュニケーションを支える重要な要素と捉えている。また、乳児が顔のような刺激への選好性を示すこと(Fantz, 1961; Simon, Macchi, Turati, & Valenza, 2003)、さらに、乳児の主体性を他者に合わせるができるという相互主体性(Trevarthen, 1979; Newson, 1977)のような研究は、乳児が自分と対面するおとなに注意を向け、それに応じることができるということであり、乳児がもつ人への指向性を示すものである。コミュニケーション・スキルにおいて親と子は非対称な関係であるが、乳児がコミュニケーションに参加できることを示している。もちろん、このような乳児のコミュニケーションを可能にする行為は、実際にはとても未成熟かつ未分化なものである。乳児の能力を捉える研究とともに、乳児の未分化な行為をおとなが意味あるものとして解釈することの重要性を訴える研究もある(たとえば、加藤・紅林・結城, 1992; Adamson, et al., 1987; Kaye, 1979; Marcos, Ryckebusch, & Rabain-Jamin, 2003; 増山, 1991)。

以上のように、前言語期の親子コミュニケーションは、相互の貢献によって成り立っているわけだが、乳児のことばの未習得はどのように補われているのだろうか。そのような観点で、親子のやりとりを見直すと、以下の例(例1)のように親が乳児のことばを言語化しながらコミュニケー

**例1) 0ヶ月男児と母のやりとり**

Y児がベビーベッドで目覚めた場面

ID	発話	行為や状況
570035	おはようだね, Yくん	Yを抱き上げながら
570036	Yくん, まだ眠いねえ	
570037	まだ眠たい	
570038	もっと寝るの	
570039	もっと寝るの	
570040	ん? Yくん, もっと寝るの?	
570041	うん, じゃあ, まだ(おっぱいを)飲みたくないね	Y児をのぞき込みながら

ションを進めていることがわかる。

例1における発話の流れをみると、ID570036の確認に対するID570037の応諾、また、ID570038および570039の主張に対してのID570040で確認の質問をしているようにみえる。つまり、発話同士の隣接ペア (Schegloff, Sacks, 1973) が成り立ち、会話であるように捉えられる。しかし、これらはすべて親の発話であることを考えると、親はひとり二役しながら、乳児に話しかけていることがわかる。つまり、自らを発話主体として発話するだけでなく、その発話の合間に、乳児を発話主体として乳児の代わりに言語化するような発話、すなわち、代弁を行っていることがわかる。たとえば、ごはんを食べている乳児に「おいしいねえ」と言ったり、おむつ替えをしながら「ああ、さっぱりした」と言ったりするように、乳児の考えや感情をおとなが言語化する発話が、代弁である。

本研究では、このような親が用いる乳児の代弁に、前言語期の乳児とのコミュニケーションの特徴と捉え、代弁に焦点化し、親への移行初期において、親がどのようにしゃべらない乳児と向き合っているかを検討する。

また、代弁とは親が乳児の代わりに声を出すことであり、乳児の声を語ることである。声とは、音声物理学的なものにとどまらず、バフチンに由来する概念で、社会文化的人格としての声を意味する (Wertsch, 1991; Holquist & Emerson, 1982)。このような声は、はじめは社会から借りてきたもので、声にあられる個人の精神機能は社会的なコミュニケーション過程のなかにその起源がある (Wertsch, 1991)。さらに、Hermansら (Hermans, 2001; Hermans & Hermans-Jansen, 2003) は、このような声をもとに複数の異なった立場の“Iポジション”が対話を繰り返すことで対話的自己を形成するとしている。代弁という発話形式は乳児にとって内化しやすいと考えられ、

乳児内的対話を支えるものと思われる。しかし、乳児自身はまだ声を発しておらず親がどのようにして乳児の声を準備できたかという視点で検討する必要があるだろう。

さらに、Wertsch (1991) は、声の特徴として、宛名 (address) について述べている。つまり、声は必ず実在、あるいは、仮定の誰かに向かって発話されるというのである。親による乳児の代弁の宛名はどこに向かっているのだろうか。本来、代弁といった場合には、代弁のメッセージを送る送り手と、それを受け取る受け手がおり、その二者を取り持つ代弁者がメッセージを運ぶ役割を担う。ところが、親子コミュニケーションにおける代弁は、二者場面でも生じている。親が代弁者であるとするなら、乳児はメッセージの送り手といえよう。では、受け手は親自身なのだろうか。それとも乳児なのだろうか。もし、親が乳児からのメッセージを受け取るだけなら、代弁のように声に出す必要はなかっただろう。あるいは、乳児からのメッセージをなぜ乳児に伝えようとしているのだろうか。つまり、代弁とは誰のものなのだろうか。

親は、それまでのことばに大きく依存したコミュニケーションに慣れていたが、子どもを持つことによって、ことばを持たない相手とのコミュニケーションが始まる。新しいコミュニケーションの様式を身につけながら、親への移行を推し進めるのだろう。言葉を持たない相手とのコミュニケーションにおいて、ことばを用いようとする親の試行錯誤を丁寧に吟味する必要があるだろう。

本研究で扱う代弁のように親から乳児へのことばかけについては、乳児に向けられた発話 (Infant Directed Speech:以下IDSとする)研究 (Jacobson, Boersma, Fields, & Olson, 1983, Fernald, Taeschner Dunn, Papousek, de Boysson-Bardies, & Fukui., 1989, Kitamura & Burnham, 2003,

Bryant & Barrett, 2007) として、心理言語学的研究にも位置づけられる。おとなは、しばしば乳児に向けて特有の発話を用いるが、これをIDSといい、ピッチの高さや抑揚の大きさ、特徴的なイントネーション、発話の短さ、頻繁な間合い、繰り返しの多さ (Kitamura, C. & Lam, C. 2009) など、音声学的な特徴に着目した研究が多く、マザリーズともいわれる。しかし、最近の研究では、IDSの機能面に着目した研究もなされるようになってきた (たとえば, Fernald & Mazzie, 1991; Thiessen, Hill, & Saffran, 2005; Werker, Pons, Dietrich Kajikawa, Fias, & Shigeaki, 2006; Fernald, 1985, Kitamura & Lam, 2009; Trainor, Austin, & Desjardins, 2000; Kaplan, Goldstein, Huckleby, Owren, & Cooper, 1995)。本研究は、親の発話という分析単位を用いることでコミュニケーション発達の質的分析における分析単位の不明瞭さの克服と同時に、IDS研究で扱ってこなかった中長期的スパンの発達的变化、すなわち、文化的な意味を親子が共有する過程について検討を試みる。

以上を踏まえ、本研究では、乳児がことばを話し出す前の生後0, 3, および、6ヶ月時点での2組の母子のやりとりを対象とし、親の発話ひとつひとつについて、誰の声であったかという視点で質的に分析を行い、代弁とはどのような発話であるのか、代弁を支える親子の関係性とはどのようなものかについて検討する。またさらに、代弁の発達的変遷を追うことは親への移行の具体的プロセスに迫ることでもあるので、続く分析のための代弁カテゴリーについての定義として整理する。

## 方法

**調査協力者** 今回分析の対象となるのは、妊娠期からの縦断研究プロジェクト (岡本, 2001; 岡本,

2008; 岡本・菅野・東海林・高橋・八木下 (川田)・青木・石川・亀井・川田・須田, 2014) に参加した東京近郊に在住する母子2組。生後0, 3, および6ヶ月の観察データを対象とする。出産時の母親の平均年齢は、31歳および28歳であり、対象児はいずれも第一子(男児1名, 女児1名)であった。なお、妊娠期からの縦断研究プロジェクト開始にあたっての協力者募集は、母親学級または両親学級で行い、書面および観察の様子を示したパネルにて調査の説明を行い、そのうえで了解を得られた親子を本研究の対象としている。

**調査時期** 1997年7月～1998年1月

**手続き** それぞれの協力者の家庭を訪問し、観察を行った。本研究においては、0, 3, および、6ヶ月時点の計3回を分析対象とする。観察は、15～20分間で、普段通りに親子で遊んでもらうよう指示し、大きな音で分析に影響がでるおもちゃ以外はおもちゃの規制は行わなかった。全行程は、親の承諾を得て録画撮影した。観察者は、親子の場面に関わらないように努めたが、乳児や親が緊張している様子があるときや観察者に働きかけがあったときには、その場が不自然にならない程度に応答した (詳細は、岡本, 2008)。観察者が応じている部分については分析からは除外した。

**分析** 録画された観察場面について、親子の発話および発声、状況についてトランスクリプトを作成した。聞き取り可能だったすべての母親の発話にID番号をふり、それぞれの観察場面において、観察開始から50発話を分析の対象とした。なお、ID番号は、親子のペア番号、月齢、通し番号の順で6桁で表示されている。観察開始とは、録画開始後、それまで観察者に向けられていた注意が親子の遊びに移行した時点とした。観察開始場面を分析の対象とした理由は、とくに低月齢の乳児は、観察時間の経過とともに機嫌の維持が難しくなることがあり、乳児が安定している時間帯に観察を

開始しているのです。その部分を分析対象とした。2組の3時点の観察それぞれにつき50発話が対象である。なお、発話単位は、統語的切れ目、あるいは、1秒以上の沈黙とした。

まず、親の発話ひとつひとつについて、誰の視点から発話されたものか、誰を発話主体とする発話形式を持つかという視点から、分類を行った。このとき、はじめから、代弁か代弁でないかという二分法で分類を行うのではなく、ある発話にどのような発話主体が含まれていたか、誰の声として親が発話していたかという視点で検討した。発話の分類にあたっては、発話のトランスクリプトだけでなく、状況が参照できるようにビデオを観ながら行った。また、発話を分析する際には、発話のある内容をどのような発話形式で生じたかということに焦点化した。つまり、本研究では、代弁という発話内容に着目しているのではなく、ある内容をどのような発話の形式で二者場面に顕在化するかという点で分析を行った。

## 結果

生後0, 3, および、6ヶ月における2組の親子のコミュニケーションにおける母親の発話について、誰を発話主体としているか、あるいは、誰の声として発しているかという視点から質的に分析

した。その結果、親の発話は、子どもを発話主体とした代弁か、あるいは、自身を発話主体とした非代弁かに二分されるのではなく、代弁のなかにも、子どものみを発話主体とするもの、親子両方を発話主体とするものなど、発話形式上異なった発話主体を持つ代弁があった。本研究では、親がどのように子どもの声を語るのかに焦点化し、子どもを発話主体に含む親の発話を広く代弁と捉えることとした。具体的には、少なくとも子どもを発話主体に含む4タイプの代弁と、子どもを発話主体に含まない非代弁に分類できた。代弁4タイプは、(1) 子ども視点型、(2) 親子視点型、(3) あいまい型、および、(4) 移行型代弁であった。以下に例を挙げながらそれぞれの代弁について述べる。

### (1) 子ども視点型代弁

まず、親から見ると、やりとりの相手である乳児のみを発話主体とした発話があった。これを、子ども視点型代弁とした(例2~4)。

例2のように、親は乳児の内的状態や行為について、乳児の視点からの発話を行うことがある。この例は、授乳中に乳児が乳首を口から離れたため、親は授乳を再開できそうか、それともこのまま終了にするか決めなくてはいけない場面である。親はまず乳児に、乳児の乳首を離れたという

#### 例 2) 0ヶ月女児と母のやりとり

授乳が中断し、母が乳児にさらに飲むか尋ねる場面

ID	発話	行為や状況
300013	M. もうおなかいっぱい(↑)*	
300014	M. もっかい、いく(↑)	
300015	M. N. はい	乳児の口元に乳首を近づける 乳児は乳首を口に含もうとしない
-	I.	
300016	M. もういらない	
399917	M. もういらない(↑)	
300018	M. よーし	授乳終了の片付けをはじめ

(\*)語尾の上がり下がりのような調子を矢印の向きで表す

行為を確認するように、「もうおなかいっぱい(↑) (ID300013)」「もっかい、いく(↑) (ID300014)」と発話している。これらの発話は、親から乳児への質問であり、親自身を発話主体とする発話形式であるため代弁ではない。次に親は、乳児が質問に答えることはできないので、「N(児の名前)、はい (ID300015)」と言いながら(これも親自身を発話主体としており代弁ではない)、乳首をもう一度乳児の口に近づけて、行為として乳児が答えられるようにする。乳児がそれを口に含もうとしないのを、のぞき込みながら、親は小さな声で「もういらぬ (ID300016)」と語尾を下げつつぶやいている。乳児が乳を含まなかった行為から、「いらぬ」という乳児の意図表示であると解釈し、語尾を上げずに乳児の代わりに言語化して発話している。このように、この発話は、乳児を発話主体とした発話形式を持つので、子ども主体型代弁とした。

次に示す例3、および、4も、例2同様に、親は

乳児の内的状態や行為について、乳児の視点からの発話を行っているので、子ども視点型代弁と分類できる。しかし、例2とは異なる状況がある。

例3は、おむつ替え中に、乳児の機嫌がゆっくりと悪くなり、断続的なぐずり声を上げ始める。乳児は激しく泣いているわけではなく、親からすると、対応次第で乳児の機嫌を持ち直させることができそうな場面である。親は乳児の断続的なぐずり声にその都度応じるように、おむつ替えの手を少し休めて、乳児の足をさすりながら「勝てる、勝てる (ID300318, 300319, 300320)」と発話する。「勝てる」とは、この親が、乳児が機嫌の悪さに勝てる、機嫌を持ち直すことができる、という意味で使っている。機嫌の悪さに勝つ-勝たないは乳児自身の意図に関わることであり、それを「勝てる(↑)」と質問したり、「勝ちなさい」や「勝ってちょうだい」と命令や懇願したりしているのではなく、乳児を発話主体として「勝てる」と発話しているため、子ども視点型代弁といえる。しかし、

**例3) 3ヶ月女児と母のやりとり**

おむつ替えの途中で、乳児がぐずり始めた場面

ID	発話	行為や状況
300318	I. んん…	(ぐずり声を出す)
	M. <u>勝てる、勝てる</u>	乳児の足をさすり始める
300319	I. んん…	(ぐずり声を出す)
	M. <u>勝てる、勝てる</u>	ぐずり声を遮り、乳児の足をさすりながら
300320	I. んん…	(ぐずり声を出す)
	M. <u>勝てる、勝てる</u>	再度ぐずり声を遮り、乳児の足をさすりながら
300321	I. んん…	(ぐずり声が大きくなる)
	M. はい、はい、はい、はい	ぐずり声を遮って

(\*) この母親は、ぐずりたい気持ちに打ち勝つという意味で「勝てる」と使っている

**例4) 6ヶ月男児と母のやりとり**

乳児を膝の上に抱き、脇をかけてジャンプさせる場面

ID	発話	行為や状況
310630	M. びよんびよんしないの(↑)	乳児をジャンプさせながら
310631	M. <u>びよん、びよん、びよん</u>	乳児をジャンプさせながら

乳児のぐずり声が機嫌の崩れていく様子を示しており、実際の乳児の内的状態としては、むしろ「勝つことができそうにない」という状況である。この親自身も、乳児のぐずり声に対して、おむつ替えを中断して足をさするなどの行為をしていることから、乳児の内的状態を把握しているものと思われる。誰かの代理で話をするという辞書的な意味での代弁で、この乳児の状況を子ども視点型で代弁するなら、「勝てない」や「負けそう」となることだろう。しかし、親は乳児の実際の内的状態とは反対の意味の「勝てる」と発話している。つまり、乳児の内的状態をそのままに代弁するのではなく、親が乳児に望む内的状態を代弁することで、乳児を誘導しようとしているように思われる。

また、例4のID310631においても、直前の「びよんびよんしないの(↑)(ID310630)」という親から乳児への質問に対して、「びよーん、びよーん、びよん(ID310631)」と返答するような発話形式を生成しており、また、「びよーん」で表す跳ねる行為が乳児のものであることから、これを子ども視点型代弁とした。しかし、この例の乳児は、乳児によく見られる足を踏ん張って跳ねるような行為をしていなかった。この例において、親が乳児の「びよんびよん」を言語化しているのではなく、普段から乳児が好んでいる「びよんびよん」の遊びを誘導しようと、このように発話しているように思われる。

例2にみられるように、親は乳児の内的状態や行為を解釈しながら、子どもの視点から代弁する

ことがある。その一方、例3および4にみられるように、発話形式としては、子ども視点型の代弁であるものの、発話内容は乳児の内的状態と反対のものであったり、行為が生じる前のものであったりと、乳児の内的状態や行為を誘導しようと代弁が用いられることもあった。

## (2) 親子視点型代弁

上で述べた子ども視点型代弁は、子どものみを発話主体とする代弁であったが、親は、自身と子どもの両方を「私たち」と位置づけて代弁する親子視点型代弁もみられた。

例5は、授乳後のげっぷをさせながらの親の発話である。乳児が大きなげっぷをしたことを受け、まず親は、「おー、出た、出た、出た、出た(ID310327)」と子ども視点型の代弁を行い、その後、乳児の背中をさすりながら、「おいしかったねえ(ID310328, 310329)」と2回繰り返している。この「おいしかったねえ」は、たとえばおとな同士で用いる際には、「あなた」と「私」の両方が何かを食べたときに、「私たち」両方がおいしかったと感じているだろうときに用いられる発話形式である。これが、子ども視点であれば、「ああ、おいしかった」などとなるだろうし、親視点(非代弁)であれば、「おしかった(↑)」となったことだろう。しかし、この場面において、親は乳を味わってはいない。親は、乳児の心地よいげっぷの音を乳児の乳への満足感と捉え、おいしかったと感じているだろうと解釈したのだろう。その解釈を、「私た

### 例5) 3ヶ月男児と母のやりとり

授乳後、乳児に排気(げっぷ)をさせる場面

ID	発話	行為や状況
	I.	げっぷをする
310327	M. おー、出た、出た、出た、出た	
310328	M. <u>おいしかったねえ</u>	
310329	M. <u>おいしかったねえ</u>	

例 6) 0ヶ月女児と母のやりとり		
授乳後乳児に排気(げっぷ)をさせる場面		
ID	発話	行為や状況
300042	M. <u>げっぷしようか</u>	
300043	M. げっぷする(↑)	
300044	M. <u>持ち上げようね、ちょっと</u>	
300045	M. よいしょ	乳児を抱き上げながら

ち」共有の経験であるかのように、親子視点型の代弁を用いていたと考えられる。このように、親は乳児に起こっていることでさえも、親子「私たち」の共有体験であるかのような代弁を用いることがあった。

例6も親子視点型代弁の例である。「～しようか」や「～ようね」などの発話形式は、おとな同士の会話であれば、「私たち」が一緒に何かをしようとするときに用いられ、「げっぷしようか (ID300042)」や「持ち上げようね、ちょっと (ID300044)」は親子視点型代弁といえる。ID300042は、例5のように、子どもの行為(げっぷ)を、親は行っていないにもかかわらず親子の共有体験であるかのように発話している。一方、ID300044は、乳児を持ち上げる(抱き上げる)という親自身の行為に対しても、乳児は行っていない行為であるにもかかわらず、親子の共有体験であるかのように親子視点型代弁が用いられている。このように、親は子どもの行為や内的状態だけでなく、親自身の行為なども、「私たち」親子の視点から発話することがあることがわかった。

### (3) あいまい型代弁

親の発話には、想定される発話主体が子どもであるか、親であるか、特定できないものもあった。とくに、日本語の話しことばは発話主体が明示的でない場合も多く、親の発話も例外ではない。

例7は、乳児が、ビデオカメラを凝視して動かなくなったことに親が気づき、この場面が展開した。親は、乳児の視線がビデオカメラにあり、また動かないことから、乳児はビデオカメラに関心を持ちつつ、それが何かわからず、考えているのだと解釈したのだろうかことが、一連の発話の内容から捉えられる。まず、ID300606の「不思議だねえ」と、親子の視点から発話した親子視点型代弁といえる。ここで着目したいのは、この後の発話の流れである。「何、あれ(↑) (ID300607)」および「何、何(↑) (ID300608)」という質問と、「ビデオ、ビデオ (ID300609)」という返答という隣接ペア (Schegloff, Sacks, 1973) を形成した一連の発話は、それぞれの発話主体が、質問と返答のうちの一方が乳児であるなら、他方が親ということになる。つまり、一方が代弁であるなら、他方が非代弁となるはずである。「何、あれ(↑)

例 7) 6ヶ月女児と母とのやりとり		
児がビデオカメラを凝視する場面		
ID	発話	行為や状況
300606	M. <u>不思議だねえ</u>	児の視線を確認するように、児を見る
300607	M. <u>何、あれ(↑)</u>	小さい声で
300608	M. <u>何、何(↑)</u>	小さい声で
300609	M. <u>ビデオ、ビデオ</u>	小さい声で



(ID300607)」「何、何(↑)(ID300608)」は、乳児が不思議に思っている気持ち(ID300606より)を言語化した乳児視点からの発話とも捉えられるが、それが何であるかわからないだろう乳児に対しての親からの質問とも捉えることもできる。同様に、「ビデオ、ビデオ(ID300609)」も、乳児の質問を言語化したID300607および300608に対して、親視点から返答をしているともとれるが、親からの質問に対して乳児が返答したようにもとれる。いずれの発話も親は声を小さくして、少し乳児に顔を寄せて発話しており、乳児の注意する対象に親が注意を向けることで注意を共有しようとする場面である。

つまり、これらの発話は発話主体が乳児とも親ともつかず、あいまいであるわけだが、このあいまいさを分析の誤差と捉えていいだろうか。そもそも微視発生的かつ状況依存的に生成される会話において、発話が発せられるその瞬間すでに、発話主体が一義的に特定されているわけではない。親自身のあいまいな視点がそのまま発話に反映されていると考えられないだろうか。どちらの声でもある未分化な発話と捉えることによって、あいまいさの積極的意味が見いだせるかもしれない。このような立場に立って、今一度、例7をみると、親は乳児の気持ちに共感しつつ、乳児から率直な疑問の言語化と、それを受け親が疑問を明示化する質問という両義的な意味を持った発話だったと捉えられる。さらに、返答部分を含めて考えるなら、どちらの発話ともいえる質問に対して乳

児の反応があれば、質問の発話が結果的に親の発話だったのだと後付け的に場を意味づけることができ、逆に、上記の例のように、乳児からの明確な反応がなかった場合、質問は乳児からの問いであったように、親からの答えとして発話の流れを維持することができる。発話主体をあいまいにしておくことで、乳児に対して一方的に代弁を押しつけることを避け、乳児がいつでも対話に参入できる隙間を残しながら、該当発話がどちらの声であってもいいような流動的な対話を構成していたといえるだろう。このような積極的な意味を踏まえて、子ども視点型代弁か非代弁かの間として、あいまい型代弁とした。

#### (4) 移行型代弁

親の発話のなかには、想定される発話主体が発話の途中で変化する移行型の代弁も見いだされた。

例8のID310333および310335の「こんにちは」は、観察者にむけた子ども視点型代弁である。乳児を観察者の方に向けて、乳児が観察者にあいさつをしているという場面を代弁によって構成している。ここで着目したいのは、「こんにちは、って(ID310334)」である。これは、「こんにちはと言っごらん」という意味の発話を簡略化したものであるが、「こんにちは」という子ども視点からの発話に、話法を示す「って」を付加することによって、親の視点からの発話に引き戻して発話を終えている。このように、ひとつの発話の途中で子ども視

#### 例8) 3ヶ月男児と母のやりとり

児を抱き上げ観察者の方に顔が向くようする場面

ID	発話	行為や状況
310332	M. はい、お客さまですよ	
310333	M. こんにちは	
310334	M. <u>こんにちは、って</u>	
310335	M. こんにちは	

点から親視点、あるいは、親視点から子ども視点へと移行する発話があり、これらを移行型代弁とした。

例8においては、親は、「って」を付加することによって、先に発した「こんにちは」が親の声ととれるかもしれない可能性を否定し、子どもの声であったことを明確に示しているといえるだろう。あいまい型代弁が、発話主体の不明瞭化であるとする、移行型代弁には発話主体の明示化があるのかもしれない。

### (5) 代弁と非代弁

以上のように、親の発話のなかには親自身の視点から発話されたものだけでなく、子どもの視点から、つまり、子どもの代弁として発話されたものがあることが見いだされた。また、これらの代弁には、4つのタイプ—子ども視点型代弁、親子視点型代弁、あいまい型代弁、および、移行型代弁—に整理できることもわかった。

ところで、ここまで代弁を分析するにあたって、親の発話を持つ発話形式に着目してきた。すなわち、親の発話の内容が乳児の行為や内的状態について正確に言及していたか否かではなく、ある内容をどのような形式で発話してきたかという分析視点である。つまり、乳児の行為や内的状態に言及する発話であったとしても、代弁という発話形式をもたない親の発話もあった。

例9は、児がほ乳瓶から音を立てながら口を離し、授乳を終了に至る場面である。乳児の様子から乳児が乳に満足しただろうと解釈した親は、「もういいかな(↑)(ID310317)」と確認し、「もういいですか(↑)(ID310318)」「もう満足しましたか(↑)(ID310319)」と続けて質問をした後、授乳終了を決めて、乳児の口を拭いた。いずれの発話も、親視点からの確認や質問であり、代弁ではない。もし、代弁形式で発話するとしたら、「もういい/もう満足だあ(↓)」(子ども視点型)、あるいは、「もういいねえ/もう満足だねえ」(親子視点型)などとなっていただろう。ここでは、代弁に対して、乳児の視点を含まない親の発話をひとまとめに非代弁とよぶこととする(非代弁には、おもちゃの代弁なども含まれるがここでは触れない)。

これら非代弁は、通常のおとな同士の言語的コミュニケーションにおいて用いられる発話といえるが、代弁とはコミュニケーションの前提となる親子の関係性が異なってくる。非代弁でやりとりをするとき、コミュニケーションの相手は独立した他者としての相手である。一方、代弁を用いることは、他者の声を借りて発話することであり、一時的に親が子どもの主体に寄り添った未分化な状態を作り出しているといえるだろう。もし、コミュニケーションの相手が、自分の意図や行為をことばで伝えることのできるおとなであれば、代弁を用いるまでもなく、コミュニケーションが成

**例9) 3ヶ月男児と母とのやりとり**  
授乳中、児がほ乳瓶から口を離す場面

ID	発話	行為や状況
	I. (ぶつぶぶ…)	
310317	M. もういいかな(↑)	ほ乳瓶と口で音を鳴らす
310318	M. もういいですか(↑)	ほ乳瓶を外す
310319	M. もう満足しましたか(↑)	
310320	M. はいはいはいはいはい	児の口を拭きながら

立するだろう。しかし、相手がことばを話さない乳児だった場合、対等で独立した相手として「もう満足しましたか(↑)」と質問したところで、ことばや身振りで返答があるわけではない。親は、自分の視点からの発話だけでなく、乳児視点の代弁を用いることで、話さない相手ともコミュニケーションを成立させているのだろう。それは結果的に、乳児が話せるようになる以前から、乳児をコミュニケーションに巻き込むこととなる。乳児は、ことばを教えられるよりずっと早い時期から、このやりとりに巻き込まれる体験をすることになる。

ここまで、4タイプの代弁と非代弁について質的に検討してきた。これらの代弁と非代弁の相互の位置づけについて、親の発話が子どもの声をどのくらい帯びていたか、親自身の声をどのくらい

帯びていたかという視点で整理すると、Figure 1 のようになる。

Figure 1のように、子ども視点型代弁は、子どものみの声を色濃く反映しており、一方、親のみの声を反映したものが非代弁ということが出来る。親子視点型代弁は、「私たち」視点からの発話であり、これは辞書的な意味での代弁にはあたらない。しかし、乳児の視点を親の視点に巻き込んでいることから、親自身の声に寄った代弁と位置づけた。一方、あいまい型代弁は、乳児の注意に親が寄り添っていく共同注意場面にみられ、発話形式としては親とも子どもともつかないが、子どもに寄り添った子どもの声をより強く反映しているものと考えた。また、移行型代弁は発話の途中で発話主体が変化するので、声の重みとしては中間とした。

また、今後さらなる代弁についての多角的な分

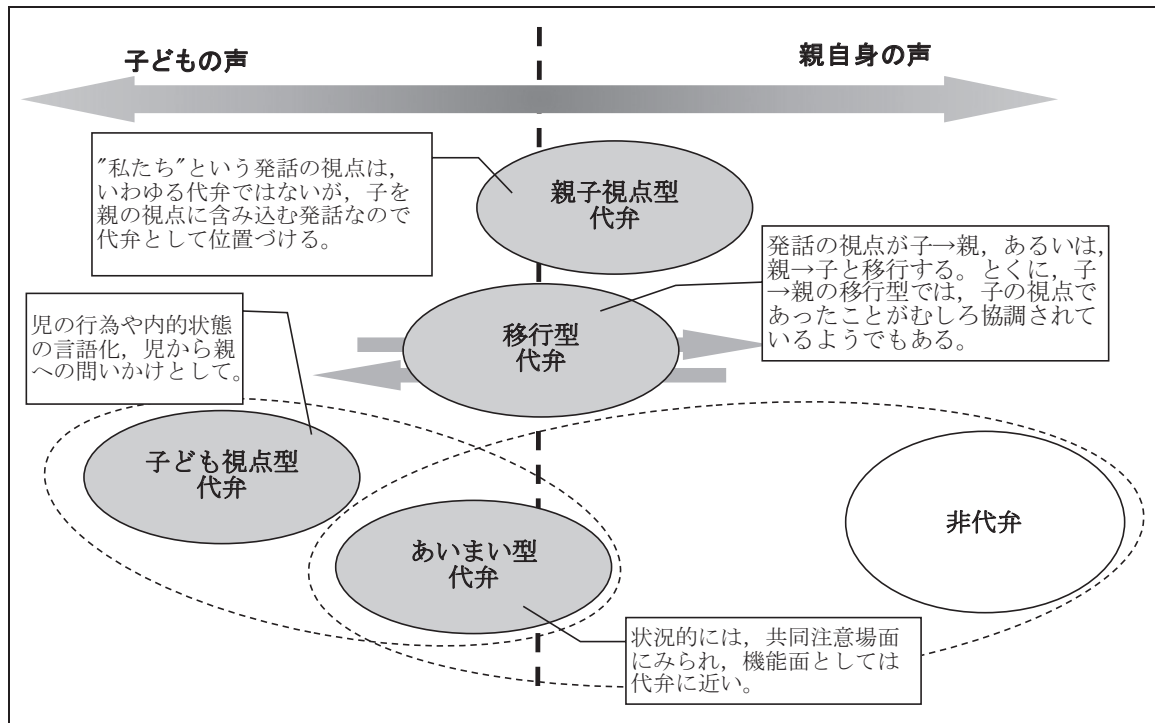


Figure 1 代弁の4形式と非代弁の関連

析を行うために、今回の結果から代弁の定義表を整理した (Table 1)。

総合考察

本研究では、親への移行の初期の親子の関係性に迫るため、前言語期の親子コミュニケーションにおける親の代弁に焦点化し分析を行った。その結果、親はまだことばを話さない乳児を相手に、親視点からの発話だけでなく、子どもの声を借り子どもの視点を含めて発話を行っていた。このような発話形式を代弁とし、発話の4タイプの代弁、および、非代弁について整理し、定義表を作成した。

ところで、本研究が対象とした前言語期のコミュニケーションは、言語的なコミュニケーション

ン・スキルはもちろん、非言語的な文化的スキルについても非対称な関係のうえに構築されるものである。親にとっては、それまで慣れ親しんだおとな同士のコミュニケーション・スキルが通じなくなり、非対称な相手との新しいコミュニケーションを模索する時期であり、まさに、親への移行の初期段階といえる。未確立な親役割や親アイデンティティとは、どのような状態といえるだろう。ここでは、親子のコミュニケーションに映し出される未確立な親の姿について、代弁を通して論じたい。

(1) 半解釈

分析から、親が代弁を行う際、親は乳児の未分化な行為や表情から乳児の意図や内的状態を解釈していることが示唆された。一方、意図や内的

Table 1 4つのタイプの代弁と非代弁についての定義

カテゴリー	定義	事例
代弁 子ども視点型 代弁	子どもを発話主体として、子どもの視点から発話された親による代弁。	【0ヶ月女児と母】授乳中断時、母が子にさらに飲むか尋ねる。「もうおなか、いっぱい？」など尋ねながら、子に乳房を近づけるが、子は口へ含まない。それを見て、「もういない」と子視点型代弁。「もういない？」と確認して、授乳終了を決める。(3000-16) 【3ヶ月男児と母親】子の両手を母親が打たせながら、「しゅんしゅんしゅん」と数回繰り返す。(3403-1,2,3)
親子視点型 代弁	親子を“私たち”として、“私たち”を発話主体とし、親子の視点から発話された親による代弁。「～ねえ」など、親子を“私たち”と捉え、子の主体を巻き込んだ発話。	【3ヶ月男児と母】子が授乳後の排気(げっぷ)をしたのを受けて、「おー、(げっぷが)でたでたでたー」と子視点型代弁に続けて、「おいしかったねえ」と親子視点型代弁で話しかけながら、子の背中をさする。(3103-28,29) 【0ヶ月女児と母】授乳後、子に排気をさせようと、子の身体を抱き上げながら、「持ち上げようね、ちよっと」と親の行為についても親子視点型代弁を用いた。(3000-44)
あいまい型 代弁	子どもや親子を発話主体として発話されたのか、親の発話として発話されたのかあいまいな発話。代弁か非代弁かあいまいな発話。	【6ヶ月女児と母】子が観察者を凝視。親は、子と観察者を交互に見て、声を潜めながら「不思議だねえ」と、子の内的状態を親子視点型で代弁。子が親に視線を移したのを受けて、「なに、あれ」「なに、なに」→「ビデオ、ビデオ」と自問自答する。問いと答の形からどちらかが代弁でどちらかが非代弁であるが、明確に分類できないので。(3006-7,8,9)
移行型 代弁	発話主体が子どもから親へ、あるいは、親から子どもへと発話内で移行する発話。「～って」「～は？」などの語尾が用いられることも。	【3ヶ月男児と母】親が子を抱き、観察者の方に向かって、「はい、お客様ですよ」と非代弁で声をかけ、「こんにちは」という子視点型代弁に続き、「こんにちは、って」という移行型代弁を用いた。“こんにちは”という代弁から、“って(言ってごらん)”という非代弁に移行するので。(3103-34)
非代弁	子どもの視点を含まない親の発話。おもちゃや第三者の代弁も。	

状態が不明確で未分化な乳児の半行為（加藤ら，1992）を親はどのくらいの確に解釈できるのだろうか。実際には，非対称な関係にある相手の意図を的確に把握することは大変難しいのではないだろうか。かりに，親が乳児について十二分に解釈できているなら，乳児の意図や内的状態である代弁を，わざわざ声に出す必要はなかったはずである。言い換えるなら，親は解釈があいまいであるから，発話として声（この声は物理的声）に出し，母子の場に顕在化する必要があったのではないだろうか。また，代弁の分類では，はっきりと子どもの声と親の声に二分できなかった。実際には，母親の声であるのか，子どもの声であるのか区別のつかないあいまい型や，声の主（ぬし）が移行する移行型の代弁も観察された。親は，あいまいな解釈を押しつけるのではなく，“試しに”親子の場に提示し，相互の調整ができる可能性を残しているのかもしれない。そう考えるなら，親の解釈は，むしろ半解釈といっていいだろう。十分な解釈に至らず，確信が持てない半解釈であっても，母親は代弁を試すことによって，乳児の意図や内的状態を知ろうとしているのかもしれない。親子は通じ合っているという言説があるが，実は，通じ合っているのではなく通じ合おうとしているといえるだろう。

そもそも，親と乳児のコミュニケーションは，乳児の未成熟な行為を，おとなが意味あるものとして解釈することによって成り立つのである（たとえば，加藤・紅林・結城，1992；Adamson, et al., 1987; Kaye, 1979; Marcos, Ryckebusch, & Rabain-Jamin, 2003；増山，1991）。未文化的な乳児の動きでさえ，“まるで”乳児に伝えたい意味があるかのように親が応答することは，乳児の意識の発生をささえ（増山，1991），おとなの解釈によって乳児の発達的な変化がうながされる（Adamson, et al., 1987）。親による半解釈とはValsiner (2007)

が述べるところ，当該状況を推論し，意味あるものとして組織化するときのある種の飛躍としての“まるで (as-if)”であるといえる。

代弁はまさに，この親子の“まるで”あるいは，半解釈のうえに成り立つといえるだろう。つまり，親が乳児の考えや感情を“まるで”知っているかのように，飛躍を含め解釈し乳児の代わりに発話するのが代弁である。

そして，親は，まだ聞いたことのない乳児の声を過不足なく推論することはできないが，親自身が当該文化において生きてきた経験的歴史をもとに，乳児の未成熟な行為を補って声を生成するのだろう。つまり，“まるで”構造における飛躍は偶然の方向で生じるのではなく，親自身の文化歴史的産物といえる。

## (2) 文化的な声

すでに述べように，親の発話を誰の声かという視点で見直すことから，今回の分析を始めた。そして，親がときに子どもの声を語ることがわかり，それを代弁として検討してきた。しかし，考えてみれば，子どもはまだ話をしない。子どもの声は，どこから来るのだろうか。親は，どのようにして，自身の発話に子どもの声を宿らせるのだろうか。

親は，前言語期の乳児とやりとりをしようとするとき，親自身の視点からの発話だけでなく，子どもの声を宿した発話，すなわち代弁を行っていた。親は，乳児が話せるようになる前から言語的なコミュニケーションに巻き込むだけでなく，多声的な対話を内化できるよう支えていた。声は，声にあらわれる個人の精神機能は社会的なコミュニケーション過程のなかにその起源があり（Wertsch, 1991），誰かの声を語るときには，声に向かう宛名 (address) やその宛名に向けられた情緒を伴った文化的意味も同時に引き受けることになる。たとえば，ある女兒は，弟が生まれたとき，

弟に対して「私がお姉ちゃんだよお～」とやや高めの優しい声で、話しかけたという。それを見た親は、女兒の“お姉さんらしい口ぶり”に驚いたそうだ。女兒は、この“お姉さんらしい口ぶり”をいつ身につけたのだろうか。おそらく異年齢の子どもとの経験や絵本や物語、テレビ番組などから、実際に自分がお姉さんになる前から徐々に身につけていたものと考えられる。親が子どもの声を語るときも同様のことがいえるだろう。親は、これまでの体験から、「子どもらしさ」がどのようなものであるのかについて、イメージが持てるようになってきている。この子どもらしさのイメージは、意識して学ぶというより、むしろ生活のなかでいつのまにか身に付いてしまうものだろう。言い換えると、このイメージは親が個人史的に構築してきた文化であり、親が所属するコミュニティの歴史的構築物としての文化といえる。そして、子どもが生まれ、いざ我が子と対面し、やりとりをしようとするなかで、我が子にこのイメージを重ねるのではないだろうか。つまり、代弁には、子どもに期待する子どもの声（子どもらしさ）が含まれていると言っている。いいだろう。

さらに、代弁のもつやりとりに巻き込むはたらきを考え合わせると、代弁が多少とも子どもの発達を導いているといえるかもしれない。もちろん、親が与えた声をそのまま子どもが継承するのではなく（後述）、親子間やコミュニティ内での試行錯誤が発達のプロセスのなかで展開されるはずである。しかし、親が子どもを解釈するときには、母親がこれまでの人生で築いてきた文化の影響を受ける。親にとって、「ふつう」「適当」と思われる文化的に妥当な方向へと解釈を導いてしまうものである。つまり、親は無自覚に子どもの代弁を行うなかで、子どもに文化的なイメージを引き継ぐ結果となる。その意味で、親子コミュニケーションにおける代弁を検討することは、子どもの文化化、

すなわち、文化になじみ、新しい文化を創造する力をつけるプロセスとして子どもの発達を捉え直すことともいえるだろう。

また、ここで強調したいことは、乳児が親からの単独の声にさらされていたのではなく、乳児は相対する声と声の対話にさらされていたのである。つまり、乳児は、そこからコミュニケーション・スキルを習得するという以前に、対話的自己を構成する道具としての初期の声を専有することができたのである。

声による対話は人生を通して自己の発達に浸透する。親による代弁は、乳児が発達初期に巻き込まれる対話のひとつであり、それは、乳児にとって内化しやすい形式のひとつであり、ダイナミックな対話的自己 (Hermans, 2001; Hermans & Hermans-Jansen, 2003) の発達を導きうる。

たとえば、Wertch (1991) は、Thrap & Gallimore (1988) が例示した6歳男児と彼の父親の会話を引用し、精神内平面における共同想起について述べている。おもちゃをなくした男児が、父親の「子ども部屋?」、「外?」、「隣の家に持って行った?」、あるいは、「車の中?」といったような質問で助けてもらいながら、おもちゃの場所を思い出すというものである。精神内平面において、外的な対話を内化することによって、子どもは彼自身のもうひとつの声として父親の声を獲得することができたのである。親による代弁とは、子どもが参加する外的な対話が内化される以前から、子どもがすでに外的な対話にさらされていることを意味する。

ところで、親による代弁において発話主体の多様性があった。すなわち、子ども視点では子どもにとっての「私」、親子視点からは「私たち」、さらに、「私」と「あなた(すなわち親視点)」があいまいであったり、それらが移行したりする発話主体がみいだされた。乳児にとっての「私」の声とい

うものは、I-ポジションを構築するだろうが、同時に、内化された「私たち」や「あなた」の声もまた、様々なI-ポジションの構築に寄与することになるだろう。その意味で、乳児は、親とのやりとりによって、発達初期から多様で変化するダイナミックな対話を内化する場が与えられているといえる。

さらに、対話における声のダイナミクスは、他の声に比べてより強い/弱い声というような、声の相対的な優位性がある。Valsiner & Cabell (in press) は触媒という観点から対話的自己におけるI-ポジションの優位性について述べているが、この優位性は外的対話に関連しており、発達的には、優位性の不安定さゆえ対話的自己の再構築が起りうるとしている。この意味で、乳児が発達初期に内化するものは、親の発話における文化的な内容だけでなく、対話の形式、すなわち、対話の道具を獲得しているといえるだろう。すなわち、代弁などによって内化されつつある文化的内容は、子どもの外的あるいは内的対話によって吟味され、文化的な内容そのものを変容させることを可能にする道具を専有するといえる。

以上のように、親は、乳児の身体的世話に慣れようとしているだけでなく、おそらく無自覚ではあるが、乳児が文化的な人として生きてゆくための足場作りをしていたといえるだろう。これは、人間社会における子育ては個人的な役割だけでなく、社会的な役割もある(陳, 2011)ことを先に述べているが、子どもの文化化という子育て機能の社会的側面を表しているといえるだろう。

本研究では、親への移行初期におけるコミュニケーションのありようを明らかにするため、親の代弁に着目し、代弁4タイプについてみいだした。さらに、代弁について、なぜ親は乳児の声を音声化して親子の場に顕在化するのかという観点から検討し、親がもつ本質的な役割について考察を試みた。ところで、辞書的な意味での代弁は、誰かの代理で話をすることであるが、本研究で扱う親による子どもの代弁は、かならずしもこの機能を果たしていたわけではなかった。つまり、代弁という発話形式で発話されているにもかかわらず、発話内容として乳児の行為や内的状態を忠実に表していないものもあった。では、代弁という発話形式はどのような機能を持ちうるのだろうか。今後は、親の視点からみた代弁の機能の発達的変遷に迫り、親への移行のプロセスを明らかにしたい。

【文献】

- Adamson, L. B., Bakeman, R., Smith, C. B., & Walters, A. S. (1987) Adults' Interpretation of Infants' Acts. *Developmental Psychology*, 23, 383-387
- Bryant, G. A. & Barrett, H. C. (2007) Recognizing Intentions in Infant-Directed Speech: Evidence for Universals. *Psychological Science*, 18, 746-751.
- 陳省仁 (2011). 養育性と教育. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 113 : 1-12
- Condon, W. & Sander, L. (1974) Synchrony demonstrated between movements of the neonate and adults speech. *Child Development*, 45, 456-462.
- Fantz, R. L. (1961) The origin of form perception. *Scientific American*, 204, 66-72.
- Fernald, A. (1985). Four-month-old infants prefer to listen to motherese. *Infant Behavior and development*, 8, 181-195.
- Fernald, A., & Mazzie, C. (1991). Prosody and focus in speech to infants and adults. *Developmental Psychology*, 27, 209-221.
- Fernald, A., Taeschner, T., Dunn, J., Papousek, M., de Boysson-Bardies, B., & Fukui, I. (1989) A cross-language study of prosodic modifications in mothers' and fathers' speech to preverbal infants. *Journal of Child Language*, 16 (3), 477-501.
- Field, T. M., Woodson, R., Greenberg, R., & Cohen, D. (1982) Discrimination and imitation of facial expressions by neonates. *Science*, 218, 179-181.
- Hermans, H. (2001) The Dialogical Self: Toward a Theory of Personal and Cultural Positioning. *Cultural Psychology*, 7 (3). 243-281.
- Hermans, H. & Hermans-Jansen, E. (2003) Dialogical Processes and Development of the Self. In J. Valsiner and K. J. Connolly (Eds.), *Handbook of Developmental Psychology* (pp.534-559). London: Sage.
- Holquist, M. & Emerson, C. (1982) Glossary. In Bakhtin, M., Holquist, M (Ed. and Trans.), Emerson, C. (Trans.) *The dialogic imagination: Four essays by M. M. Bakhtin* (pp. 423-434). Austin: University of Texas Press.
- Jacobson, J., Boersma, D., Fields, R., & Olson, K. (1983) Paralinguistic Features of Adult Speech to Infants and Small Children. *Child Development*, 54, 436-42.
- Kaplan, P. S., Goldstein, M. H., Huckeby, E. R., Owren, M. J., & Cooper, R. P. (1995). Dishabituation of visual attention by infant-versus adult-directed speech: Effects of frequency modulation and spectral composition. *Infant Behavior and Development*, 18, 209-223.
- 加藤隆雄・紅林伸幸・結城恵 (1992). 1歳児と養育者の相互作用における社会的行為の構造—幼児の《半行為》と成人による《過剰解釈》—. *家庭教育研究所紀要*, 14, 96-103.
- Kaye, K. (1979). Thickening thin data: The maternal role in developing communication and language. In M. Bulkwa (Ed.), *Before speech: The beginning of interpersonal communication* (pp.191-206). Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Kitamura, C. & Burnham, D. (2003). Pitch and communicative intent in mother's speech: Adjustments for age and sex in the first year. *Infancy*, 4 (1). 85-110.
- Kitamura, C. & Lam, C. (2009) Age-Specific Preferences for Infant-Directed Affective Intent. *Infancy*, 14 (1), 77-100.
- 厚生労働省 (2003). 平成15年度版厚生労働白書.
- Marcos, H., Rychebusch, C., and Rabain-Jamin, J. (2003). Adult responses to young children's communicative gestures: joint achievement of speech acts. *First Language*, 23 (2), 213-237.
- 増山真緒子 (1991). 「心理的人間」となる子どもたち. *現代思想*, 19 (10), 104-115. 東京: 青土社.
- Meltzoff, A. N. & Moore, M. K. (1977) Imitation of facial and manual gestures by human neonates. *Science*, 198, 75-78.
- Newson, J. (1977). An intersubjective approach to the Systematic description of mother-child interaction. In Schaffer, H.R. (ed.) *Studies in Mother-Child Interaction*. (pp.47-61). New York: Academic Press.
- 岡本夏木 (1982). 子どもとことば 岩波書店.
- 岡本依子 (2001). 母親と子どものやりとり. やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編著). *カタログ現場心理学 (第二章)* 新曜社.
- 岡本依子 (2008). 親子のやりとりについての観察のしかた. In 岡本依子・菅野幸恵 (編著). *親と子の発達心理学—妊娠期から乳幼児期に縦断的研究* (pp.41-50). 東京: 新曜社.
- 岡本依子・菅野幸恵・東海林麗香・高橋千枝・八木下(川田)暁子・青木弥生・石川あゆち・亀井美弥子・川田学・須田治 (2014). 親はどのように乳児とコミュニケーションするか: 前言語期の親子コミュニ



ニケーションにおける代弁の機能. 発達心理学研究, 25, 23-37.

Schegloff, E. A. & Sacks, H. (1973) Opening up Closings. *Semiotica*, 8, 289-327.

Simion, F., Macchi, C. V., Turati, C., & Valenza, E. (2003). Non-specific perceptual biases at the origins of face processing. In O.Pascalis & A.Slater (Eds.), *The development of face processing in infancy and early childhood: Current perspectives* (pp.13-26). New York: Nova Science Publishers.

Tharp, R. G. & Gallimore, R. (1988) *Rousing minds to life: Teaching, learning, and schooling in socila context*. NewYork: Cambridge University Press.

Thiessen, E. D., Hill, E. A., & Saffran, J. R. (2005) Infant-Directed Sppech Facilitates Word Segmentation. *Infancy*, 7 (1), 53-71.

Trainor, L. J., Austin, C.M., and Desjardins, R. N. 2000 Is Infant-Directed Speech Prosody a Result of the Vocal Expression of Emotion? *Psychological Science*, 11 (3). 188-195.

Trevarthen, C. (1979) Communication and cooperation in early infancy: A description of primary intersubjectivity. In Bullowa, M. (Ed.). *Before Speech: The beginning of interpersonal communication* (pp.321-347). London : Cambrigde University Press.

Valsiner, J. (2007) *Culture in Minds and Societies: Foundations of Cultural Psychology* (pp.300-357). Los Angeles: Sage Publications.

Valsiner, J. & Cabell, K. (in press) The trialogical structure of the dialogical self. In *Handbook of Dialogical Self*.

Werker, J. F., Pons, F., Dietrich, C., Kajikawa, S., Fias, L., & Shigeaki, A. (2006). Infant-directed speech supports phonetic category learning in English and Japanese. *Cognition*, 103, 147-162.

Wertsch, J. (1991) *Voices of the Mind—A Sociocultural Approach to Mediated Action*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.

#### 注)

1: 本研究にご協力いただきましたご家庭のみなさまに心より感謝申し上げます。なお、本研究は、やまだようこ・サトウタツヤ・南博文(編著). 2001.『カタログ現場心理学』の第二章, 岡本依子「母親と子どものやりとり」を大幅に加筆修正したものです。

## Parental Proxy Talk for pre-verbal infants in parent-infant communication

Yoriko OKAMOTO Yukie SUGANO Manabu KAWATA Miyako KAMEI Reika SHOJI  
Akiko YAGISHITA-KAWATA Chie TAKAHASHI Yayoi AOKI Ayuchi ISHIKAWA

### **[abstract]**

How can parents communicate with their infants before the infants learn to talk? Even adult-adult communication requires effort. We communicate using verbal clues as well as cultural-historical preverbal ones. Nevertheless we can still end up misunderstanding each other. It is even more difficult to communicate if the partner in communication is a pre-verbal infant who does not speak and use common gestures yet. Carefully observing communication between parents and their infants reveals that parents keep talking to their infants using Parent Proxy Talk. Not only were they talking to their infants from their own perspectives, but they were also talking as a proxy, using their infants' voices. The videotaped verbal and nonverbal mother-infant interactions were analyzed and revealed four types of Parental Proxy Talk; (1) from the child's view, (2) from the views of both the mother and child, (3) from an ambiguous view, and (4) from a transitional view. It was discussed about a process of enculturation by focusing on Parental Proxy Talk.

### **[key words]**

Parental Proxy Talk, parent-infant communication, longitudinal study